

三重大学キャンパスサイドスクール協働プロジェクトの実践

須曾野仁志*1・下村 勉*1・小山 史己*2・林口 友香*3
鈴木 早苗*4・出口 明*5・白井 智子*6

三重大学教育学部教育学部附属教育実践総合センターと三重大学周辺に位置する公立小学校が連携し、実践センターに設置された大型プリンタの活用、小学生・大学生合同の授業など、様々な協働プロジェクトを進めてきた。小学校の授業で資料を大きく提示したり、掲示物を作成する上で、大型プリンタは役立ち、小学校教員が実践センターを訪れ、大学教員と情報交換をする機会が増えた。また、情報の内容に関わる小学生の授業活動を大学生がサポートする活動は、小学生と大学生両者にとって、学ぶべきことが多く有意義な実践となった。

キーワード：地域連携、キャンパスサイドスクール、合同授業、大型プリンタ、学習支援

1. はじめに

2004年4月に国立大学が法人化され、大学が果たす役割として、「教育」「研究」以外に「地域貢献」（または「社会貢献」）が、3つめの柱として、重要視されている。

理科系の工学部や生物資源学部であると、産学協同での製品開発や技術利用などが考えられるが、教育学部ではこれまで

- ・教員対象の研修・研究会での講師・助言者
- ・公開講座の開催
- ・出前授業

などの地域貢献活動が行われてきた。

これらの活動は、教育学部教員が、教職員や児童生徒を対象に話をしたり、専門的な立場からアドバイスを行うトップダウン的なものである。本研究プロジェクトでは、その発想とは異なり、大学教員及び学生と、地域の学校の教員及び児童生徒が、協働でとり組める活動を進めていく。

須曾野は、教育学部主催フレンドシップ事業案内で、2003年7月津市立栗真小学校を訪れたが、その際、学校の廊下で児童がとり組んだ掲示物を見た。栗真小学校では、総合的な学習の時間に、児童が同じ栗真地区内に位置する三重大学のことを取り上げ、学生へのインタビューなどを壁新聞でまとめていた。その中で、「三重大学はとてもいい大学」という児童が書いた文字が目にとまった。この学習成果を見て、須曾野は「この子どもたちの

ために、大学として何かできることはないか、一緒に学べるできないか」と考えるようになった。

教育の中でも、特に、学部附属施設である附属教育実践総合センター（以下「実践センター」と略記する）が、学部および附属学校園と、地域の学校および教育機関をつなぎ、様々な活動を実現・支援していく役割が、地域貢献で重要である。本研究では、三重大学（津市栗真町屋町）周辺に位置する公立学校と連携し、この学校と協働で様々なプロジェクト実践を試みた。

2. 三重大学キャンパスサイドスクール協働プロジェクト

(1) 三重大学キャンパスサイドスクールとの協働

本研究では、三重大学（津市栗真町屋町）の周辺半径4キロの間に位置する津市立栗真小学校、白塚小学校、北立誠小学校、南立誠小学校、一身田小学校と、三重大学教育学部附属教育実践総合センターが連携をとりながら、学校教育活動を支援することを目的に様々な活動を行うこととした。本活動を「三重大学キャンパスサイドスクール協働プロジェクト」と名付けた。

大学の周辺半径4キロ程度の公立小学校に限定したのは、

- ・公立学校教員が数分の内に実践センターに来ることができる
- ・大学生が歩いてまたは自転車を用いて15分以内に小学校を訪問できる

という良さがあるからである。ただし、プロジェクトの展開によっては、距離的に遠い学校にもコラボレーションを広げようとした。

*1 附属教育実践総合センター
*2 津市立南立誠小学校
*3 津市立栗真小学校
*4 津市立白塚小学校
*5 津市立北立誠小学校
*6 津市立一身田小学校

(2) 三重大学キャンパスサイドスクール協働プロジェクトの目的

本プロジェクトの主な目的は以下のとおりである。

- 1) 教育学部及び実践センターが近隣小学校に対して地域貢献できることは何か
- 2) 大学生が近隣小学校でどのような教育活動に参加し、どのように貢献できるか

(3) 教育学部特有の地域貢献

これまで、公立小学校と三重大学教育学部との連携活動は、

- ・学部生の教育実習の引き受け
 - ・学部教員からの児童及び教員対象の調査依頼
 - ・学部行事（フレンドシップ事業など）の呼びかけ
- などがあり、大学側から公立校に一方的にお願いするものが多かった。

教育学部特有の地域貢献を考える上で、教員養成および現職教員の教育を担う教育学部の特色を生かし、具体的に次に示す活動を推進することが大切である。

- ・児童生徒を対象とした学習支援活動
- ・学校現場のニーズに応じた活動
- ・学校教員と大学教員の協働（コラボレーション）

また、大学による地域貢献の内容として次のことがらが重要である。

- ・教員が個人レベルで行うものより、活動の主体が「組織的」なもの
- ・活動の継続性が「単発的」なものより「継続的」なもの

(4) 公立小学校と三重大学教育学部との連携活動

2004年度、本プロジェクトの中で、実践センターがキャンパスサイドスクールへの支援として具体的に考えたものを示すと以下ようになる。どの内容も、各学校の要望に応じて進めるもので、大学側が一方的にお願いするものではない。

- ・大型プリンタ（B0版までの大きさ）を用いた掲示物の作成
- ・情報教育にかかわる授業支援（児童対象）
- ・実践センター教員を講師とした教員研修
著作権・プレゼンテーション・ポートフォリオ評価等
- ・学習・情報機器活用での実践支援相談
- ・学校・グループ・個人レベルでの研究助成支援
- ・大学生による教育活動ボランティア派遣の相談

実際に、本年度、大型プリンタを用いた掲示物の作成と、情報教育にかかわる授業支援に重点を置いた活動を進めてきた。

以下、本論文では、コラボレーション活動の中でも、

大型プリンタ（B0版までの大きさ）を用いた掲示物の作成と情報教育にかかわる授業支援（児童対象）について詳しく述べる。

3. 大型プリンタを用いた掲示物等の作成

実践センターに、B0版までの大きさがプリントできる大型プリンタが導入されたのは、2001年度である。それ以後、実践センター教員や学部教員が、学会ポスターや行事案内、横断幕などをプリントしてきた。また、学校現場、特に小学校において、どのように大型プリンタが活用できるかについて、実践センター研究員・研究協力員制度により、2002年度に、津市内小学校教員数名にお願いして進めてきた。

本プロジェクトでは、キャンパスサイドスクールの教員が、学校として、実践センターに来て、大型プリントを作成した（写真1）。

大型プリント作成の流れは次のとおりである。

学校でファイル作成 A4

Word 一太郎 Excel 花子など

→ 実践センターの大型プリンタで拡大プリント
サイズ B0 ~ A1

または

資料を実践センターに持ち込み、A3 スキャナでスキャンし、画像取り込み

→ 実践センターの大型プリンタで拡大プリント

実際に、学校教員がプリントしたものを列記する。

- ・学校内案内図
- ・時間割
- ・1日の日程表
- ・運動会の退場門
- ・研究発表用掲示
- ・研究会での講演題目・講師の掲示
- ・英語教材の拡大
- ・児童会委員会での発表資料



写真1 北立誠小学校教諭による大型プリント作成

- ・総合的学習の成果まとめ
- ・研究発表用掲示
- ・デジカメ写真拡大プリント

学校現場での大型プリンタの活用を用途で分類してみると

- ・掲示（貼る）用
 - ・児童への提示（見せる）用
 - ・看板・横断幕（掲げる）用
- となる。

また、使用目的で分類すると、

- ・校務用
 - ・学習指導用
 - ・児童学習用総合的学習まとめ、委員会活動
- となる。

次に、学校教員にとっての大型プリンタ利用のメリットをまとめてみると、次のようになる。

- ・児童にわかりやすく情報を伝える
- ・学校での成果を大きく掲示・提示

特に、学校を訪問する人に、研究会発表時に

- ・教材制作、掲示物作成 時間短縮
- ・修正が容易

実際に、キャンパスサイドスクールの教員が作成した大型プリントは、職員室や廊下に貼っておくための掲示物の作成が多かった。このような掲示物を教員が手書きで作るとかなりの時間を要するが、大型プリンタを使うと、校内案内図、授業日程表、時間割表が短時間のうちに作成された。

大型プリンタを用いるのに、興味深い活用法は、児童の学習成果をまとめ、発信をしていく上での使い方である。その中で、

- ・大きな紙に、デジカメ写真を何枚かプリントし、そこへ児童に感想を書き込ませたり、紙を貼り付ける。
- ・児童がコンピュータを用いて制作した作品をプリントする
- ・児童と大学生が合同で作成したポスターを大きくプリントして校区内に貼る

といった活用が興味深いものであった。

もし、大型プリンタがない場合、掲示・提示物として、A3程度の大きさの紙でプリントしたり、分割プリントした紙をつなぎ合わせて掲示物を作ることになる。小さな紙では、児童や教職員が遠くからは見にくい。現在では、小さな提示資料でも大きく拡大できるビデオプロジェクタの導入が進んでいるが、紙での提示・掲示は手軽にできるものであり、ずっと掲示板に貼っておけるというメリットがある。

4. 小学生・大学生合同授業の実践

(1) 南立誠小学校での小学生・大学生合同によるホームページ作成

津市立南立誠小学校において、児童によるホームページ作成の実践は2001年より始まっている¹⁾²⁾。初年度には、三重大学教育学部学生5名（下村・須曾野担当のゼミ学生（情報教育課程））が、6年生の児童約20名（学年の中で一部のページ作成グループ）のホームページ作成を支援した。2002年度からは、「6年生児童全員にホームページ作成を作らせたい」という小学校側の意向と、「教員養成課程学生に小学生のホームページ作りをサポートさせたい」という思いが重なり、須曾野が担当する教育学部授業「教育工学」（教員養成課程対象、参加学生約30名）の中で、小学生・大学生合同のホームページ作成教室を計画した。その授業は、前期に毎週月曜日13:00~14:30に開講されているので、南立誠小学校での授業は、この時間帯に合わせ、大学生が小学校を訪れて行うこととした。（毎年2回実施したのは、2クラスあるため）

2004年度は、本コラボレーションプロジェクトの一環として、小学生・大学生合同によるホームページ作成授業を実践した（写真2）。その概要と特徴は特徴は以下のとおりである。

= 概要 =

- ・実施日
 - 6月7日（月） 13:20-15:00頃 6年1組
 - 6月14日（月） 13:20-14:30頃 6年2組
- ・対象児童 小学校6年生 約80名（2クラス）
- ・支援学生 授業「教育工学」参加約35名
- ・ページ作成テーマ 修学旅行の思い出ページ
- ・とり組み内容・方法
 - ホームページ作成ソフト「ホームページビルダー」を用いて、児童がページを作成する。

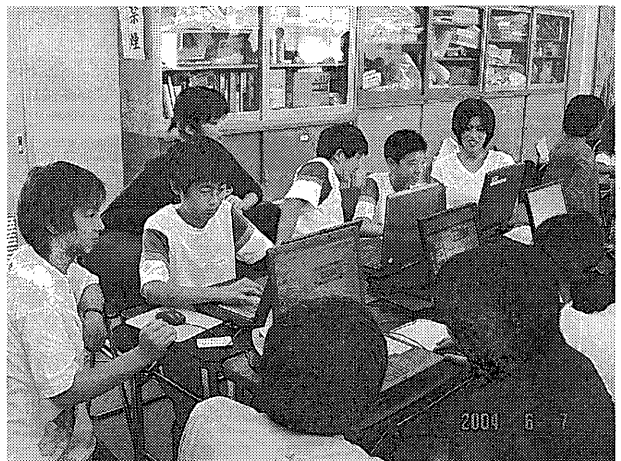


写真2 南立誠小学校での授業風景

＝特徴＝

- ・教員による一斉指導をほとんど行わず、児童1～2人に、大学生1人が付きサポートする
- ・大学生は6グループに分かれ、グループ単位でサポートする
- ・児童がノート型パソコンを1人1台使えるように、大学側からパソコンを持ち込む
- ・デジカメ（大学からの貸し出し）を用いて、修学旅行で撮影し、それをページに入れる。

本活動での実践成果をまとめると、以下のようになる³⁾⁴⁾。

- ・大学生のサポートを受けながら児童が Web 作成を行うと、一斉指導では難しい細やかな対応が可能となり、短い時間で Web ページ作りを行うことが可能となった。一斉指導型で小学校教員が指導してページ作成をさせた場合と比べ、2分の1程度の時間で児童がページ作成ができた。
- ・大学生と小学生の合同授業での関わりは、お互いにとって魅力あるものであることがわかった。しかし、お互いにとって充実した時間にするためには、事前の準備が重要であると考えられる。
- ・家庭にコンピュータが普及し、児童も大学生もホームページへの関心が年々高まってきたこともあり、自分たちの手で情報発信することの良さを実感することができた。
- ・大学生と小学生を比較してみると、「やりがいがあったか」「学ぶことは多かったか」で、大学生の方が強く肯定している比率が高い。サポートする側の方が高い満足度を示している。
- ・ホームページ作り以外に、大学生が小学生と話をする機会が多く、「教育実習前に体験できてよかった」という大学生のコメントが多かった。

(2) 栗真小学校での小学生・大学生合同によるポスター作成

さらに、本コラボレーションプロジェクトの一環として、栗真小学校において、小学生・大学生合同によるポスター作成を実践した（写真3）。その概要と特徴は特徴は以下のとおりである。

＝概要＝

- ・実施日
 - 7月5日（月） 13:20～14:30 頃
大学での授業時間に合わせて
 - 7月7日（水） 13:20～14:30 頃
授業などが無い学生が参加して
 - 7月8日（木） ポスター印刷、学校へ届け
- ・対象児童

小学校1、2年生 約40名（各学年1クラス）

- ・支援大学生
 - 学部授業「教育工学」参加約35名
- ・学習活動内容
 - ポスター作成
 - 地域行事「マリンフェスタ」を呼びかける
- ・とり組み内容・方法
 - ワープロソフト「ワード」を用いて、児童と大学生が「マリンフェスタ」を呼びかけるポスターを作成する。
 - コンピュータは大学から持っていったものを使い、1グループ1台使う
 - 児童40名は、12のグループに分かれ、3～4名で1枚のポスターを制作する。コンピュータは、大学から持ち込み、グループで1台利用する。

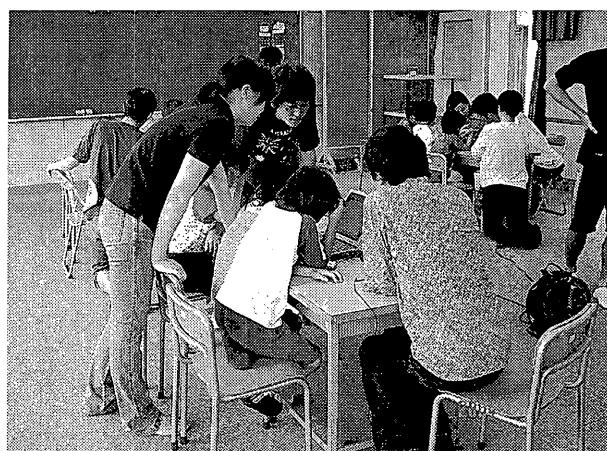


写真3 栗真小学校での授業風景

＝特徴＝

- ・コンピュータへの文字入力はまだほとんどできない低学年の子どもたちを大学生が支援し、いっしょにポスターを作成する。
- ・事前に、児童が手書きした下絵を大学生が大学での授業でワードを使って案を考えておき、子どもたちと話し合いながら作品を制作する。
- ・事前、事後に、大学生宛に「おたより」をもらう。大学生もあとで、返事を書く。

本活動で得られた成果をまとめると、以下のようになる。

- ・小学校低学年児童に一斉指導型で小学校教員が指導してコンピュータを使わせると、入力がしにくく泣き出す児童もいたようだが、大学生の支援があると、そういうことはなく児童の実態に合った支援ができた。
- ・小学生が低学年であること、それをどう支援するか大学生が学べた。
- ・大学生にとって、大学近くでの小学校区内で行われている行事に参加することは大学近くのことをよく知ることにつながった。（栗真地区には、下宿して住んで

いる学生も少なくない。)

- ・子どもたちから手紙を何回ももらったり、授業時間中に歓迎の歌を聞かせてもらったことは大学生のやりがい、地域貢献をする意欲向上につながるようになった。

5. 本プロジェクトのまとめ・課題

(1) 広がる活動の輪

栗真小学校での合同ポスター作成教室に参加した大学生の中に、障害者支援のことを内容とするサークル活動に関わる学生がいた。その学生を含め、3人の学生が小学校へ完成したポスターを届けた際、校長室で小学校教員と懇談する機会があった。その際、小学校で2学期に予定されている人権学習の計画が話題となり、その学生がサークルのメンバーにも呼びかけ、「自分たちでとり組んでいる活動などを子どもたちに話ができたら」ということになった。それがきっかけで、2学期、栗真小学校では、1、2年生を対象に「みえだいがくたんけんーバリーフリー学習」という実践が行われた。11月15日には、小学校児童40名が実際に三重大学を訪れ、三重大学で体が不自由な学生がどのように学べるようになっているかについて、実際の様子をみたり、学生に質問をした。写真4は、実践センターで行われた大学生と小学生が学ぶ活動の様子を撮影したものである。

三重大学教育学部では、学生教育活動支援委員会を2003年度に設置し、教員をめざす学生の学外での学生教育活動(通称「教育ボランティア活動」)を支援している。現在、学校現場から多様な活動への参加を要請されているが、小学生・大学生合同授業で小学校を訪問することは、学校現場の様子を見たり、授業への積極的な参加体験をすることにより、学校から依頼があった教育ボランティア活動に参加しやすくなっているのではないかと考えられる。

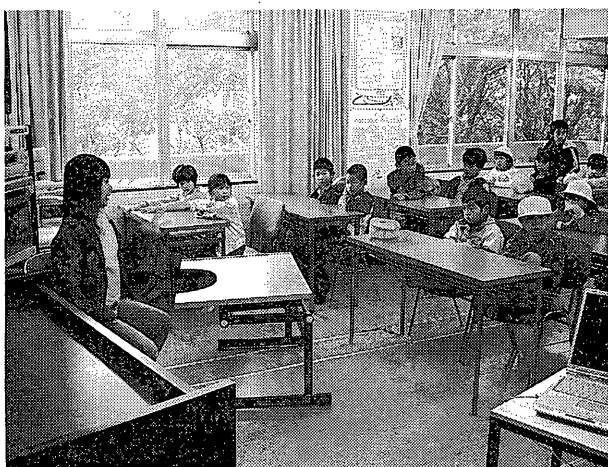


写真4 実践センターでの「みえだいがくたんけん」授業風景

(2) 大学におけるプロジェクトベースな学習活動の実践

4. で述べた合同授業を実践するには、大学側と小学校側の思いが合致し、様々な条件が合わないと実現されない。特に、時間的なことが問題である。

教育系大学では、教育実習以外に、授業観察や校務作業補助等で、大学生を学校現場に派遣する動きが進んでいる。大学生がやりがいを感じるのは、単に「見る」だけでなく、児童生徒の学習に関わり、自分自身が学校教育に役立つの思える活動である。本実践では「やってよかった」という大学生の感想が多く得られた。実際に、南立誠小学校での合同授業を実施した後では、「どのように子どもたちを支援すればよいかよい経験になった」「子どもたちといっしょにホームページを作成する宇ことで自分のページ作成能力が向上した」「小学校での情報教育のことがよくわかった」という点が調査結果からも明らかになっている³⁾。

大学の授業では、教師が一方向的に講義を進める一斉指導型の授業が多い。教員養成を目指す教育系大学では、大学生が教職に就いた場合に役立つように、参加型・体験型・実践型の授業を実現・改善することが重要である。特に、実習、演習を内容とする学習で、小中学生とのコラボレーション授業を実践するのが効果的であろう。本報告で述べてきたように、大学授業の中で「子どもたちといっしょにホームページを作る」といったプロジェクトを企画し、それをベースに大学生たちが様々なことを学ぶことが大切である。

(3) 大学に近いという地の利を活かした活動

本プロジェクトを進め、学校現場の数多くの教職員に喜んでもらえたのは、大型プリンタの活用であった。このプリンタで印刷するために、学校教職員は実践センターに来訪する必要があったが、大学が距離的に車で10分程度と近く、気軽にプリントのため大学を訪れることができた。1枚の大型プリントには、5分~15分の時間が必要であるが(大きさによってかかる時間が異なる)、その間、プリントを待つ時間に、大学教員と小学校教員が情報交換し、お互い有益な情報を得ることができた。

今後、大型プリンタ活用以外に、近隣の学校教職員が三重大学教育学部近くに学校が立地するというよさを活かすために、実践センターがとり組むこととして、以下のことがらが挙げられる。

- ・日頃の教育実践に活かすための教育情報の整備
- ・大学での図書館などの施設活用支援
- ・学習・情報機器の活用支援、活用ノウハウでの助言
- ・学校での実践・研究活動を進めていく上での人的支援

(4) プロジェクトの発展・拡大

本プロジェクトは、2004年度三重大学教育学部学部

長裁量経費地域連携分（30万円）を得て行われた。この経費を獲得できたので、近隣小学校の教員が学校教育活動を進める上で必要な大型プリントを印刷したり、合同授業の様子を記録に残すことがしやすくなった。地域連携のプロジェクトを発展・拡大していくには、プロジェクト推進のために十分な経費を確保することが重要である。

2004年12月27日に開かれた教育学部附属教育実践総合センター主催の第2回 iCERP（アイサーブ）研究会で、学部および附属学校園教員、近隣公立学校教員等を対象に、本プロジェクトについて研究発表した。この研究会での参加者の中には、大学と地域の学校との連携活動やプロジェクトに興味を示す人が多く、次年度に小学校での授業実践を計画している学部教員がいる。

今後、このような活動を、学部、附属学校園、地域の学校にいかを広げていくか、充実した内容にしていくかが課題となっている。

6. おわりに

次年度も、大学近隣の学校と連携を密にし、大型プリントの活用、児童のための教材開発および実践、小学生・大学生の合同授業等を進めていく予定である。

本プロジェクトの様子をさらに多くの人々に知ってもらうために、活動の成果や様子を Web 発信することにもっと力を入れていきたい。

付 記

本研究は2004年度三重大学教育学部学部長裁量経費（地域連携分）の助成を受け行われた。

参考文献

- 1) 小山史己・稲垣博美・須曾野仁志・下村勉「津市立南立誠小学校における「地域に学ぶ総合的な学習の時間」の実践をサポートする三重大学教育学部の役割」三重大学教育学部附属教育実践総合センター紀要第22号、p89-98, 2002. 3
- 2) 小山史己・稲垣博美・須曾野仁志・下村勉「小学生・大学生によるホームページ作成合同授業の実践」日本教育工学会研究報告集、p65-68, 2003. 7
- 3) 須曾野仁志・下村勉・小山史己・稲垣博美「小学生のホームページ作成を大学生が支援する学習活動の成果」日本教育工学会第19回全国大会講演論文集、p 671-672, 2003. 10
- 4) Hitoshi Susono・Tsutomu Shimomura・Hiroki Koyama・Hiromi Inagaki「Creating Web Pages with Elementary Students in the Preservice Curriculum」SITE2004 (Society for Information Technology and Teacher Education) Proceeding, p3714-3719, 2004. 3